

## 北原白秋の詩精神-俳句・俳論をめぐって-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学日本文学研究会 公開日: 2009-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西山, 春文 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/5380">http://hdl.handle.net/10291/5380</a>

# 北原白秋の詩精神

——俳句・俳論をめぐって——

西山春文

## 1

明治・大正・昭和という時代を駆け抜けた北原白秋。その五十八年の生涯は近代文学の転形・展開の時期にある。しかもその著作は詩・短歌・随筆・評論・童謡・民謡と多彩である。白秋が手を染めたこれらの文学形式の幾つかは、これまでに様々な曲折を経てはきたが、いずれの流れも現代まで辿り着いてきた。大河あり、白糸のような細き流れありだが。しかも今日では、この各々の流れが滅多に交わることなく流れているような感が強いが、白秋にあっては一人の内部で全てが絡み合いながら書かれるべくして書かれた作品であろう。もちろん、当代においても一個人がこれ程幅広く創作活動を行った場合の風当たりは相当強いものがあつただろうが、彼は自らの詩的理念を完遂することに一生を賭けた。ただ、彼の作品群が膨大であるがために、今だ白秋の精神は明確なものとはされていないように思える。彼の精神の足跡を追う上では、もちろん詩歌作品は最重要であるが、彼の残した多くの散文の存在も忘れてはならないだろう。というのも彼は、他人或は他人の作品についてはあま

り多くを語ってはいないが、自己の思うところ、自己の作品についてはその散文においてかなり明確に表明しているからである。その中でも、大正十一年の萩原井泉水との論争は、

私の一番今まで嫌いだったし嘗つてしもしなかつた論難弁駁の筆を、何だか後ろから衝き出されるやうな気がして執つて了注1ひました。

と白秋自身が記しているように、彼の筆になるものの中でも異色の、激しい論である。しかも、この論は、白秋が生涯を通じて本格的に手を染めることのなかつた俳句についての言及もみられる重要な論である。本稿ではこの論争を中心に検討し、白秋の詩的理念の一側面を明らかにしたい。

## 2

注2 木俣修氏は白秋の詩業の展開を、習作時期を含めて四期に分類している。

第一期 明治三十八年頃まで。「文庫」によつた習作時期。

第二期 明治末期まで。「邪宗門」・「思ひ出」・「東京景物詩」

の時代で西欧文学摂取、官能主義的作品を生み出した。

第三期 大正六・七年まで。「畑の祭」(未刊詩集)・「真珠抄」・

「白金之独楽」にみられる、光明礼讃・法悦主義の時代。

第四期 「水壘集」にはじまり「海豹と雲」・「新頌」に及ぶ、枯

淡閑寂時代。

この区分法は、生前の白秋の傍らにいた一歌人の目を通してのものであり、大方当を得たものと言えるだろう。さらに木俣氏は近代詩の流れの上から、右記区分のうち第二期と第四期を白秋詩業の二つの峰としている。ただし、この区分は狭義の詩に重点を置いたものであり、これに短歌・童謡等も加えて考えると多少趣の違った図式が見えてくる。というのは、第一期は青年白秋の文学への憧れを秘めた文字通りの習作時期であり、第二期は新進詩人として波に乗りかけた華やかな時代であったが、第三期よりは一概に詩人とか歌人という名で呼ぶことがためらわれる様相を呈しているからである。この時期より、白秋は様々な文学形式による創作を試みている。詩、短歌のみならず、短唱集「真珠抄」(大正三年)・片仮名書き詩集「白金之独楽」(同年)・散文集「白秋小品」(大正五年)・児童芸術雑誌「赤い鳥」(大正七年)への参画等、それまでの創作範囲を四方へと広げていったのがこの時期である。

大正元年、人妻との恋愛から姦通罪で告訴、拘置されたことは(二週間後に保釈、最終的には無罪免訴となったが)彼の奔放たる精神を鬱屈させるに十二分のものであり、以後しばらくの彼の筆はその精神の解放へ向けての苦闘の痕跡でもあったと言えるだろう。ただ、その一女性との出会いと恋愛の進行途上にあつては必ずしも

あまり深刻に苦闘していたとは思えない節もある。恐らく、釈放された後、執筆活動を続けるにあつての世間からの疎外感によって一層の罪悪感を抱いたのであろうし、この一件を意識的に以後の創作のための強靱な踏み台としたとも考えられるのである。自らの作品を語るときにこの事件について晩年まで触れる意識にはこういう一面があつたとも考えられる。いずれにしても、白秋の創作活動の第三期はそういう特異な精神の営みの産物と見ることができよう。ただ、それだけの理由で闇雲にあらゆる文学形式の間を行き来したとは考え難い。だとすれば、彼の創作活動の広がり裏には何かあつたのだろうか。その一つが定型の問題であろう。

ところで白秋の、詩型に対する考えかたはいかなるものであつたのだろうか。そこには厳然たるものがあつた。

私は民謡も童謡も作る。私の民謡も童謡も世の民衆なり児童なりに歌われてゐる。しかしかうした定型外の民謡なり童謡なりは、万人への贈り物となり、万人の酒となり薬味とはなるであらうが、本来は私の創造物である。誰でもが作れるといふわけのものでもあるまい。だから歌つてはくれるが、短歌や俳句や俚謡正調のやうに、読者即作者といふわけにはいかない。で、芸術民謡には普遍性はあつても、個の詩人の特性は厳としてゐる。

で、自由詩型は容易に万人のものにはなりえない。

定型詩が何が故に万人から喜ばれるか。ここをよく思考する必要がある。

それは作者のみならず、読者もその作法をよく弁へてゐるからである。<sup>注3</sup>

この言には白秋の自負が溢れているが、それ以上に定型ということについて冷静に分析してみせる実作者白秋の姿に驚かされる。白秋は第四期より次第に短歌に集中していき、昭和十年、「多磨短歌会」を創立する。これは二十年ぶりの結社の設立であるが、ここへ向かうまでの白秋の内部には、右に引用したような定型へのこだわりがずっと胚胎していたに違いない。その意味でも、木俣氏の区分における第三期から第四期へかけての白秋の様々な試行の足跡に注目したいのである。

3

大正十一年七月「短歌雑誌」に荻原井泉水は「詩と俳句との関係」という小論を発表する。

廣い意味で云へば、俳句も亦詩のうちであるには相違ないが、詩を長詩といふ意味にして、「詩」と「俳句」との二つの分野はもつと密接に考察をし、又、研究をすべきものだと思ふ。<sup>注4</sup>

この冒頭に掲げられている、詩と俳句の接近の唱道が目的の論だが、井泉水の筆の運びはかなり苦しげである。「詩壇は俳壇を繼子扱ひにしたり、輕蔑したりしないやうにして欲しい。」等<sup>注5</sup>という論調からは痛々しい感さを受け取る。ここで、井泉水がこのような線の細い論を書かねばならなかった経緯を簡單に見ておこう。

荻原井泉水は明治末期の河東碧梧桐等の新傾向俳句運動に参加する。そして碧梧桐と共に雑誌「層雲」を創刊する。この時の趣旨について、

さて、私が層雲を發行するという趣旨は、新傾向俳句の研究と普及ということではあるが、そればかりではない。(中略)俳句を純文学の立場から研究する、文壇にも新傾向俳句の出生したる精神を参考してもらいたいという意味での、新しい機関誌を作ろう——それが私の層雲発刊の趣旨だったのである。<sup>注6</sup>

と後に回想している。そして、さらには無季・自由律へと向かい、碧梧桐とも別れている。

つまり、「詩と俳句の関係」を書いた頃の井泉水は、俳句をある意味で俳句の伝統から遠い所へ連れ出そうとしていたのである。そのため、一雑誌の狭い誌上で同志や弟子ばかりを対象とするのではなく、文学全体という広い土俵を所望していたようである。そして、その対戦相手の一人に北原白秋を選んだ。このことから、当時の俳壇から見ても白秋という存在が大きかったこと、一部の俳人にとつては目障りであったことを伺い知ることができよう。

この論の眼目は

一、俳句のマンネリズムを打開するための新しい俳句の提唱。

「つまり、在来の『俳句の爲の俳句で』なく、『詩としての立場から出發したる俳句』を正しい俳句の道とする。

二、「白秋氏の試みられる短詩短唱の如きものは究竟する所、遂には俳句に到達すべきものではないか」

三、「古い俳句を出て一旦新しい長詩の領域に入り、長詩の領域から、其表現を押しつめて来て、究竟した所のものが即ち新しい俳句である」

の三点に集約できよう。

これに対し、白秋は大正十一年十月一日「詩と音楽」に「詩と俳句(一)自由律について、萩原井泉水君に」「詩と俳句(二)再び井泉水君に」と題して反駁の筆を執っている。

まず、井泉水の唱道する、俳壇と詩壇との接近ということについて、「詩と俳句、詩壇と俳壇とが今後愈々接近せなければならぬといふ貴説には私も同感です。無論短歌も歌壇もさうあるべきです。」と賛同の意を表する。と同時に井泉水と自分のここまでの道程の違いを示している。

事実に於て、私は詩から歌に入り、歌から短唱に來、更にもう一層詰めつめて來てゐます。然し私の短い自由詩は貴兄たちの新傾向の句とは出発点が違ふので、矢つ張り本質的にリズムの上から相違がある事も事実です。<sup>注8</sup>

白秋の自負、そして相手へ向ける鋭い剣先。様々な詩歌形式の狭間で試行錯誤を繰り返してきた白秋の姿がここにある。実際、白秋は単に創作者として歩んできただけではなかった。それ相應の勉強もしてきている。例えば、大正七年七月十四日執筆の「詩と俳句」では、当代の日本の詩と俳句との關係を述べるに際して、「新体詩抄」の果たした役割を分析しながら日本の伝統と詩人の精神について言及している。<sup>注9</sup> このことから考えても、恐らく、井泉水が白秋へぶつけた問題は、既に白秋自身にとっての命題となっていたと想像される。だからこそ、論の冒頭から穏やかながらも井泉水へ向けて一矢放つことができたのだらう。というのは井泉水はゲーテ、シラーへ傾倒しながらも一貫して俳句という様式から離れることのなかった人であり、もっと広い視野から考えることをしてきた白秋にみれ

ば、その論の、その目指すところの弱さが日についたに違いない。それでは、井泉水の白秋批判に対して白秋自身はどう反論したか。それを具体的に見ておこう。井泉水の第一の眼目である詩と俳句、詩壇と俳壇の接近については既に引用した通り、まず賛同の意を示しているが、引き続き次のように述べる。

ここで一つ、貴兄の信条を拜見します。「俳句の爲の俳句」でなく「詩としての立場から出発した俳句」といふ事です。無論この詩は広義の意味の詩だと思ひます。それならば当然の事であつて、芭蕉の昔から俳句は詩の一分野であつた筈です。で、俳句の価値といふものも詩としての俳句の価値であるべきで、またさうだつたと思ひます。俳人芭蕉は根本的に詩人であり、俳句は詩としての光榮の中にあつて、短歌その他とたゞその相に於てのみ差別を見るといふだけです。結局は詩です。それを詩の精神以外に俳句ありと謬信した俳人といふものが若し有つたとしたらば実に驚きます。<sup>注10</sup>

白秋の筆によるこのアイロニーは、当時の俳壇・歌壇にいた全ての人々に向けられたものである。と同時に、白秋と井泉水の詩歌の出発点の相違をも表して面白。つまり、白秋は広義の詩から出発し必要に応じて種々の詩歌形式へ触手を伸ばしたのに対し、井泉水は俳句という一形式に手を染めた後に広義の詩への認識を新たにしているのである。では、白秋は創作者として詩と俳句、及び他の詩歌形式の相違をどのように意識していたらうか。これは井泉水が掲げた第二、第三の眼目への反論ともなる。

私自身では、よく同じ材料から短歌を小唄を或は詩を、或は子供の言葉でもつて童謡を作つてみる事もあります。然しこれは一つの花瓶のカンナの花を右から見たり左から見たり前から見たり或は斜めから、後から見て画にすると同じ行き方で、一つ一つの場合にやはり一つ一つの差別相と独自性とを十分認めた上での事です。(中略)

で、私は感動の度合とその形の差別とによつて、抒情と云わず象徴と云わず、長詩、短詩、小曲、小唄、民謡、童謡、短歌、短唱、俳句、新古さまざまの形式を以て自由に表現する事にしています。一つの形式を固執しません。私には一の形式に固執する人の気が知れないのです。<sup>注11</sup>

これを読むかぎり、井泉水が生涯俳句に執着し、その変革を志したような一の形式へのこだわりが白秋にはなかったように思える。にもかかわらず、白秋ほど形式の一つ一つにまで研究、吟味を加えた詩人は恐らくないだろう。ここに表れる白秋の一見無節操とも思われる創作態度。ここにこそ白秋の近代の一詩人であろうとする地味で粘り強い精神がある。

そういう白秋にとつては、既に井泉水等の言う「新しい俳句」の限界が見えていた。「貴兄の提唱は全然自由詩、自由律の提唱だと思ひます。<sup>注12</sup>」「新傾向の俳句は在来の俳句といふ定形律若くは季題の規約に対する固定観念を放棄したものであるからして、思ふさま徹底せしむれば、純粹無二の自由律の表現になります。<sup>注13</sup>」つまり、伝統俳句の存在によつて、自由律も無季も俳句としての存在を主張することができたのである。万が一伝統俳句を完全に解体せしむるこ

とができたならば、その後に残るのは、俳句などというものはなく、白秋の言う通りに完全なる自由詩、或は単なる散文であろう。白秋の内では、少なくとも自分の携わる分野においては、伝統的なものと近代的なものとの区別は明確になされていた。だから、詩歌形式の問題も「これは表現の問題のやうであつて、その実その個々の精神、つまり主観の問題です。<sup>注14</sup>」と言ひ切ることができたし、形式の問題で苦闘する人々がいる時代にあらゆる形式の中で自己表現することが可能だったのだらう。こう考えると、北原白秋という人は井泉水が「新しい俳句」の喧伝のために向かう相手としては厳格かつ自由な精神の持ち主であり過ぎたと言えるだらう。

4

では、詩歌形式を「主観の問題」とする白秋が俳句を書くとするば？ という疑問が残る。

白秋の俳句は約三百が全集に収録されている(白秋の句集としては白秋没後に木俣修が編んだ「竹林清興」(昭二十二・靖文社)がある)。そのほとんどが大正十年から昭和二年の間に発表されている。つまり、萩原井泉水と俳句について論争した時期に句作も試みており、俳句に寄せる関心の深さが確かめられる。ところが、自由律へ向かおうとする井泉水を否定した直後の大正十三年より昭和二年にかけて白秋自身が定型を破る俳句と思えるものを作っているのである。それを初めてまとめて発表した時の言には次のようにある。

昨夜、鎌田君<sup>注15</sup>が見えたので徹底して俳句型の短詩を書いて見た。それが「蕨の藪」である。「石楠」の新年号に出した分はわ

ざと旧調を守ることにしたが、今度は全然変へて見た。つまりまだこれ等は小手しらべであるからそのつもりで見たい。き度い。一作一作にまた違つて来るだらうと思ふ。<sup>注16</sup>「日光」創刊号・大正十三年四月一日)

この「日光」には「露の臺」と題して自由律俳句とも言える短詩十九句を掲載している。例えば次のような句である。

徹夜の日の出ほる苦い露の臺を焼いて

住みついてとなりの梅のおふよ

つくしが出たなど摘んでゐれば子も摘んで

林檎をかちつて、夜、浪の音がしてゐる

椿が咲きましたと活けに來た妻<sup>注17</sup>

この時期の白秋は、子供の作る自由詩や話し始めたばかりの長男の口について出る言葉、つまりふるいにかける前の生の言葉を大切にしており、そういう言葉の面から見ると、これらの句は白秋の感性と彼の呼吸の一部を推察する資料にはなるが、あれ程厳格な韻律に対する思想を披瀝した後の発表作とは思えない。俳句・短詩等という呼称はともかく、どの作品も散漫である。白秋の短歌にあるような一点へ向けての凝縮力、或は白秋の体温や生命からの迸りがここにはない。ほんのりと暖かい家庭生活の営みが多少句い立つ程度である。白秋は何故敢えてこのような所にまで手を伸ばしたのだろうか。

恐らくこの問題は、晩年の白秋の著作に芭蕉や宮本武蔵に関する記述が多いことと無関係ではあるまい。「詩と俳句」に於いても次

のように記している。

切望するのは一番大切な不易的の深く物に浸潤する愛、芭蕉の句のやうなさながらの句、自然の心を心とした、高い詩境を景仰させるやうな、さうした句です。<sup>注18</sup>

私は最高最上の詩の三昧境はもつと楽な自由自在な悠々寛々たるものではないかと思ひます。隙とか緊張とかを忘れて了つた、而も微塵の隙もない、武者芸で云ふと宮本武蔵のやうな境地がさうではないかと思ひます。<sup>注19</sup>

もちろん、初めからこうした詩境にあつたのではなく、俳句だけを除外した様々な試行の後に辿り着いたのである。しかし芭蕉や武蔵に詩の三昧境を見出した時、自らの俳句の可能性をも考えたとしても不思議ではなからう。白秋は芭蕉の精神のみに憧憬していた訳ではなく、その俳句に詩作の上での理想を見出し出していた。

不思議と、私が思ふのは俳句のリズムは求心的であると云つても芭蕉の句の響は却つて遠心的に拡がつてゆく。さうして凡てに満ち亘つて行く。(中略)不自由であるべき定形律に却つて広大な自由があり、ほとんどさながらの氣息を歎息を、味ひそのもの<sup>注20</sup>香氣そのもの氣韻そのものとして、その世界に私を引き包んで了ふ。

これは正に白秋の希求してきたところであろう。しかも、これまで手を染めて来なかつた詩型だけに興味大なるところがあつたのではなからうか。

だが、俳句の世界で白秋の理想とする所を実現するのは難しい。なぜなら彼の関心は専ら、定型において「近代の感覚、知性、髓<sup>注21</sup>」を表現することに向かつており、この実現をめざすには近代の俳句はあまりにも語らぬ文学であり過ぎた。もともと白秋の創作者としての資質はしゃべることにあつた。「主観の問題」をしゃべること作品として定着してきた。一句一首を生み出すために黙して語らぬ人とはなりえなかつた。だからこそ種々の文学形式を駆使することも可能だつたし、その折々に応じて必要でもあつたのである。又、白秋の「詩」という概念規定の一つに音楽性という要素があつたことも、俳句との距離の置き方に大きく作用していた筈である。井泉水との論争が各々真剣かつ精力的なものでありながら、両者の間にどこかしらずれを感じさせるのも、結局は詩における音楽性という認識の有無に起因している。そして、白秋の考える音楽性は、自由詩より定型詩で、俳句より短歌で実現され得る性質のものであつた。それがあえて俳句に向かうならば、萩原井泉水がそうであつたように白秋も早い時期に限界にぶつかることになつていただろう。実際にはこの後白秋は俳句形式において「小手しらべ」をすらすらとどまる。と同時に「いま己れがやらなければ日本の歌はどうなる！」<sup>注22</sup>という厳しい覚悟をもって短歌に全精力を傾けていく。近代的なるものに囲まれつつあつた彼がその認識の上に立ち、短歌という定型へ歩みを進めたことは、白秋個人の資質の実現と抑制という意味では幸いだつたし、伝統的なるもの、古典的なるものを近代がどのよう<sup>注23</sup>に受容するかという不可避の時代の要請でもあつたと言えよう。

白秋の詩精神は、近代、主観、音楽性、を日本語において調和実現させるための孤独な旅の途上にあつた。この一徹な思いは当

時において真に理解されることはほとんどなかったが、現代へつながる詩の、短歌の流れはいずれもここから流れ出すことになる。

注

- 注1 「北原白秋全集」岩波書店一九八四年より刊行、現在刊行中（以下「全集」と略記）第十八卷「短歌と俳句 五度、萩原井泉水君に」二六八頁。
- 注2 「北原白秋詩集」解説 旺文社文庫 一九七八年 二七一―二七二頁。
- 注3 「全集」第二四卷「歌道一夕論」一一八頁。
- 注4 「短歌雑誌」一一頁。
- 注5 同右 一二頁。
- 注6 「此の道六十年」春陽堂書店 一九七八年 二九頁。
- 注7 「全集」第十八卷 二二二頁。
- 注8 同右。
- 注9 同右 第三五卷 三九八頁より。
- 注10 同右 第十八卷 二二―三頁。
- 注11 同右 二二―四五頁。
- 注12 同右 二二―三頁。
- 注13 同右 二二―四頁。
- 注14 同右 二二―四頁。
- 注15 「鎌田君」は「日光」の発行兼編輯人。
- 注16 「全集」第三七卷「日光同人雑記」一一四頁。
- 注17 同右 第三八卷 一九―二三頁。
- 注18 同右 第十八卷 二二―二頁。
- 注19 同右 二二―一頁。
- 注20 同右 二二―二頁。
- 注21 同右 第二四卷「多磨の書」五三頁。
- 注22 「白秋抒情詩抄」解説（吉田一穂著）岩波文庫 一九三三年 三一―六頁。
- （本学大学院博士後期課程在学）